

サケ学習の一年

授精式

秋、豊平川に遡上した親サケから採卵した卵を受精させる「授精式」が、さけ学習館で行われた。作業すべてに子どもたちが参加する体験学習だ。卵に精子を混ぜて水に浸すとオレンジからピンクに変色。新しい命の宿る瞬間の神秘的な光景に、子どもたちは真剣なまなざしを向ける。



①雄のサケから卵に精子を掛ける。
②卵と精子をよく混ぜ合わせる。
③水に浸すと受精が始まり色がピンクに。



「かわいい」、「小さいけど元気だよ」。さけ学習館に、子どもたちの歓声が響き渡る。子どもたちが受精させてから優しく見守って来たサケの卵が、冬休み直前の十二月中旬ごろからふ化し始め、年が明けるところにピークを迎える。小さな体に大きな目、おなかには栄養の詰まった臍嚢（さいのう）を抱いたかわいい姿に、子どもたちの愛着心も大きく膨らむ。

待望のふ化



小さな体で元気良く泳ぎ回る仔魚に笑顔がこぼれる。



養魚槽内のふ化の様子を観察。

放流式

「授精式」から半年。子どもたちが真心込めて育ててきたサケの稚魚も、体長五センチメートルほどに成長し、放流の時期を迎える。豊平川で行われた放流式には全校児童が参加。「大きくなって帰って来いよ」、「元気でね」などと励ましの言葉を掛けながら、各自が持参したカップから川面に優しく放流していた。



放流した稚魚の元気な様子に、指を差して大喜び。



励ましの言葉を掛けながら稚魚を放流。

遡上観察



④間近で見るサケに興味津々。
⑤サケの体長測定も。
(④⑤写真提供 東白石小)



四年の回遊を終え、豊平川に戻って来たサケを見るのが遡上観察だ。札幌市豊平川さけ科学館の職員から、サケの体の特徴や雄と雌の違いなどの説明を受け知識を深める。産卵後に死んだサケが、ほかの魚などの餌として役に立っている話などから、子どもたちは自然の素晴らしさを知り、環境の大切さを学び取る。

取材を通して

身を乗り出して真剣なまなざしを向ける子どもたち。昨年十月末に行われた「授精式」の様子に、「サケ学習」がきめ細やかで素晴らしい体験学習であることが見て取れた。受精からふ化、飼育、四年後の遡上を願って放流するまでの体験が、子どもたち自身にサケの親としての気持ちを経験させる。それが生き物を慈しむ気持ちや豊かな心をはぐくむことになっているのだらう。ふ化した仔魚を見る時のうれしそうなお顔、放流式で稚魚を川面に放す時の優しい表情がその事実を物語る。



写真提供 東白石小

子どもたちの励ましを一身に受けたサケは、四年後に親サケとなって戻って来る。それを願う子どもたちの思いは「サケ学習」によって、これから受け継がれていく。

参考文献 『サケとわたしたち』（市立東白石小学校発行）